法事讃を通して見たる善導大師

小西存祐

一　はしがき

私はこゝに法事讃といふものを通して、しばらく善導大師の面影を偲んでみようと思ふ。

併しさうするには先だつてまづ法事讃といふものに就いて、その大體を解説して置く必要があると思ふ。所詮自分は法事讃といふものが瞭つきりと互ひに理解せられたならば、自然にそこに今いふ樣な大師の面影も浮んでくる譯で、已下さふした心もちで法事讃の一斑を解説してみやうと思ふ。

二　法事讃の性質

法事讃は一言にしていふと、阿彌陀經の轉讀といふことを中心にして組みたてられてゐる淨土門の一つの行法で、その作法を書き表はしたものが上下兩卷ある。具さに「轉經行道願往生淨土法事讃」といひ、略してたゞ法事讃と云つてゐる。作者は言ふまでもなく善導大師である。

いつたい善導大師の著作は今日すでに散逸したものも有り、又現に傳つてゐるものゝ中にも眞僞未決のものも有るが一般にまづ確かなものとしては、謂はゆる五部九卷である。

五部—
一 觀經疏……四卷
二 觀念法門……一卷
三 般舟讃……一卷
四 法事讃……二卷
五 往生禮讃……一卷
—九卷

五部九卷は通常これを二つに分ける。一つは立義分で初の觀經の疏四卷がそれである。此の中に凡入報土の大義を始め、往生の行業としての五種正行といふものが明かされてある。謂はゆる讀誦、觀察、禮拜、稱名、讃歎供養の五つがそれで、其の中、前三後一の四種は助業、第四の稱名止行は正定業で有るといふことは改めて言ふを要しない。

今ひとつは行儀分で、是は次の觀念法門已下の四部五卷がそれで有る。此等四部の中には前に擧げた四種の助業を以つて、正定業を助成する實際の行軌が明かされてゐるが、中に於て今この法事讃は記主上人の料簡によると、讀誦正行のそれを明かしたものだと云ふことに爲つてある。

尤も上人のこの料簡は、四部對望した上に一往かく配屬をせられたまでゞ、嚴密にいへば法事讃はたゞ單に讀誦正行の行軌のみが明かされてゐるといふ譯ではない。その中には禮拜のそれも有れば讃嘆のそれもあり、また供養のそれも有る。けれども何んと云つても讀誦の行がその中心となつてゐる事は一見明瞭で、又その意持からいへば、讃嘆といふことが總ての行法の基調となつてゐる。つまり法事讃は、讀誦の行によつて極樂の二報莊嚴を讃美するといふことがその主眼で、言換へればこの行法の主體は轉經といふことに在る。轉經とは詳しくいへば彌陀經を轉ずるの義で、言ふこゝろは、たゞ單に經文を讀誦するといふ意味ではない。經文を諷詠し讃語を唱和して佛事を爲すことで、謂はゆる詠經である。行道はたゞその詠經に附隨した行法の一つを擧げたまでゞ、其等を總稱して法事といふ。法事の精神は願往生

淨土にある。仍て題して轉經行道願往生淨土法事讃といつてある。

三　法事讃と阿彌陀經

法事讃は上述の如く、彌陀經の轉讀といふことを主眼とした行法であるが、何ゆへ大師が本讃に於いて、三經中特にこの經を選まれたかと云ふことに就ては、別に大師に於いてはつきりとその理由を述べてゐられる所とては無い。けれども大師が一生この經をもつて、その行本としてゐられたことは事實である。されば彼の指定の疏を撰述せらるゝや日別に「阿彌陀經を誦すること三徧」とあり、又その脫本の時も「日別に阿陀彌經を誦すること十徧」と云ひ、又た人を勸めては

或は願じて阿彌陀經を誦すること十萬徧を滿せよ日別に十五徧なれば、二年に一萬を得、日別に三十徧なれば一年に一萬なり。或は誦すること四十五十百徧已上の者、願じて十萬徧を滿ぜよ。

等と云つて、切りにこの經の持誦を勸めてゐられる。爾かのみならず傳記によれば、大師がその信施を將つてこの經を書寫せられたことは實に數萬卷に及んだと云ひ、現に先年その願經の斷片が新彊の地方から發見されてゐる。全體何ゆへに大師が斯くもこの經を尊崇されたので有らふか。

蓋し想ふに阿彌陀經は、その分量からいつて極めて短篇な經典で、いわゆる「小經」であり「小本」である。現に大師も觀念法門の中にこの經を呼んで「四紙經」と云つてゐられる。尤も南山の大唐內典錄を見ると、羅什の譯本は五紙求那跋陀羅の翻譯は四紙、玄奘のそれは十紙と云つてあるが、兎も角その淨土三部經の中に於て一番小部なもので有ることは事實で、從て實際の行持といふ上から見て非常に便利であつたと云ふことがまづ第一の理由で有つたと思はれる。

第二には、その內容が簡單に頗る要を得てゐたと云ふことである。と云ふは、この經まづ初に

（一）極樂の方處を出し　（二）依正二報の名義を辨じ
（三）往生人の得益を說き　（四）その行因を述べて一日七日の執持名號を出し
（五）六方諸佛の證誠を擧げて　（六）發願々生が勸めてある。

乃ちこうした點が我れ〳〵の欣求の信を勸むる上に、非常に都合が好かつたこと、察せられる。これ第二の理由であらねばならぬ。

第三には、この經すこぶる小編では有るがその全體を通じて能く三佛の大慈悲が窺がはれ、殊にその謂はゆる無問自說の經說なるに於て、後世淨土門の內には、一代諸經の結經とさへ立論する者（密要決口傳抄並に等）が有るに至つた。されば宗々それ〴〵依用の經典が有るが、心經とこの彌陀經とは現に我國などで各宗共通の聖典とされてゐる。勿論大師に於て瞭つきりと然うした明言は無かつたにしても、その心持だけは確かに在つたであらふと思はれる。否な現に今の讃文の內に髣髴として爾うしたお詞が見へてゐる。これ其の第三の理由である。

要するに阿彌陀經は、形式內容共に實際の行持といふ上から見て淨土門依憑の經典中、これ位ひまとまつたそれは無かつた譯でやがて大師が自他ともにその持誦を勸め、又この法事讃に於て特に讃述をしてゐられる所以である。

三　內容の組織

法事讃の內容、組織については前々來の說明よりして略ほ想像がされ得るごとく、大體から言つて先づ三つの大きな部分に分けることが出來る。卽ち前行分、轉經分、後行分がそれで有る。

（一）前行分

是れは劇なごでいふと序幕といつた部分で、卽ちこの行法の序分である。この中また五段に分れるが、所詮は次の轉

經分を惹きをこす前提に外ならぬ。

一「先請護法衆」　初の「奉請四天王」以下、八句の偈頌がそれである。この中、四天王と獅子王とが奉請されてゐる。四天王は護法の善神であるから、それを奉請するといふことは勿論不思議はないが、獅子を同樣、護法衆として奉請するといふことは一見頗る奇怪なことの樣に考へられる。それに就いていろ〳〵解釋が無いでもないが、要するに獅子は謂はゆる百獸の王で、辨正論などによれば獅子にも復た護法の力が有ると云はれてゐる。

夫れにしても今この行法の劈頭、何故それらの護法衆を奉請するかと云ふに、蓋しそれは道場の周圍に結界を施し警護を爲さんが爲めで、卽ちこの一段は密敎でいふ道場結界といふことに相當してゐる。尤も本宗でも別時法要の初に方り、通例四方洒水といふことを行ずるが復た同樣の心から來てゐる。

二「次叙行法大意」　次の「序曰」以下の文がそれで、卽ち已下行ぜんとする行法の趣旨を述べられた一段である。是は普通にいへば「表白」といふものに相當するので有るが、然し普通にいふ表白はその修せんとする法會の趣意を、本尊ならびに大衆にむかつて啓白するのが通例である。所が今のはそれとは少しく趣を異にしてゐる。つまり是の一段は、大師が行法の最初にあたりその會衆をして、豫め法會の趣旨を了知し置かしめんがため特に設けられた夫れで嚴密には、固より表白と稱すべきものではないが、矢つ張りまた表白の一種であると見ることが出來る。從つて其を行法中へ攝して、讀む讀まぬは古來隨意とされてゐるが、併し大師が護法衆を奉請する次にこの一段だ置いてゐられる所から見れば復た讀むのが至當だと考へらる。

三「次奉請三寶」　已上まづ道場を結界し行法の大意を述して、既に萬般の設備が整つたから、次に正しく三寶を奉請するの一段になる。

この中また兩段あつて、初に先づ偈頌を以て略して三寶を召請し、次にまた長行をもつて重ねて廣く三寶が請讃して

ある。是は一見重復した樣にも見へるが、經論中には屢々出づる重頌といつた形式で卽ち懇懃の貌である。

又た長行、廣く三寶を奉請する中、別して偈文を以て觀音菩薩を讃嘆してあることは、私記の解釋によれば、觀音は彌陀右脇の侍士で極樂の上首の菩薩に在しますからだと云つてある。つまり菩薩の代表として請讃をせられたものだと見ればそれでよい。

尙ほ又、この奉請の一段、單に奉請とは云ふが自然にその內には、敬禮、讃嘆、供養等の行法が附隨して明かされてゐる。是はわれ〳〵が客を請待する時のことなどを考へて見れば自づから了解が出來る譯である。

四　「次明行道」　上に奉請した三寶に對して行道を行ふの一段である。だい〳〵行道は、本と印度の貴人に對する禮法で卽ち敬慕の意味から起つたそれである。西域記によれば、印度では禮後行道をするといふことが、歸敬の至だとされてゐると云ふことである。今この七周行道も無論さふした心もちから來てゐることは言ふまでもないが、その間また讃文を以て佛恩の廣大なることを慚謝し、悲喜こもゞ〳〵次の轉經を引起す前提をなしてゐる。

五　「次明懺悔」　前段、佛恩の廣大なるを慚謝し、顧みて己が長時流浪の苦を想ふにつけ、この懺悔の一段が來たのである。この下まづ總じて六障を懺悔し、更に觀佛三昧經を引いて地獄の苦相等が煩はしい迄に述べられてゐる。併し實を言ふとこの懺悔の一段は、全體の行法の連絡から觀て次の後懺悔へ合併しても可い譯である。然るに今ま大師が特に之を茲に別開せられた所以は、次に明かす欣求の境に對し厭離のそれを對比せしめんが爲で有つたと思はれるこれ大師がこの懺悔の一段に、その罪體よりは果相に重を置いて述べてゐられる所以である。

(三)　轉　經　分

是はこの行法の主體となるべき部分で卽ち正宗分である。この中、彌陀經を十七段に分け、段々讃文を附して極樂の

二報莊嚴が讃美してある。其のこゝろ蓋し我れ〳〵の厭欣の信を勸めんがためで有つたことは、最初の序分に

但し以れば、如來の善巧、總じて四生を勸むるに、此の娑婆を棄てゝ極樂に生ぜんことを忻ひ、專ら名號を稱し兼ねて彌陀經を誦せしめ給ふ。彼の莊嚴を識り斯の苦事を厭ひ、三因五念畢命を期と爲し、正助四修刹那も間なからしめんと欲すればなり。

と云つてある邊から觀ても明らかである。

所が彌陀經は前にも述べた樣に、われ〳〵の欣求の心を勸むる上には誠に恰好な經であるが、他面また厭離の心を强調するには何といつても物足りない所がある。これ大師が懺悔の一段を前後に分けて、前段特に地獄の苦相を詳說せられた所以であらねばならぬ。

(三) 後行分

先の前行分、轉經分を序論、本論とでも稱すれば、この一段は恰度結論に相當する部分で、卽ちこの法事讃の「むすび」である。この中また五段ある。

一「後懺悔」　この下、別して身三口四意三の十惡を擧げて、一々それが鄭重に懺悔してある。是は蓋し一つの懺悔を總別に分けて轉經をその中間に挾み、厭離と欣求と表裏あひ應じて、次の發願々生を引き起こす意趣に外ならなかつたと考へられる。

二「後行道」　行道は上述の如く歸敬の表示であるが、今この後行道は、最初に奉請した諸佛世尊が正さに法事も終を告げて、是から本國へ還歸し給はんとするに際し最後の歸敬を表するの一段である。世間の風儀でいへば、客の訣れに際して幾度か名殘を惜むといつた貌である。この間また自づから往生を願求するの心が表白されてゐる。

三「唱佛呪願」　是は日常の勤行法でいへば「願以此功德、平等施一切」といふ總回向の文に相當する一段で、

即ち上來所修の功德を、法會の施主、同行の諸人、並に一切の有情に回向するそれで有る。文見易し。

四「七禮敬」　通例、勤行の最後に在つては佛法僧の三寶を拜して、「三拜」または「三歸禮」といふことを行ふが、今この法事讃では、所請の賢聖が七尊あるから七禮敬を用ひてある。上の行道の時に七周を用ひたのも復たこの意からである。

五「隨　意」　法會の最後、運心を以て經を三處に送り、合法久住、利樂有情を希念する一段である。謂はゆる三處とは一に塵尼寶殿、是は天上界の法藏である。二に龍宮大藏、是は龍族護持のそれである。三に西方石窟、是は人中のそれである。彼の燉煌地方から發掘された大師書寫の彌陀經も、或は斯うした動機よりして大師がし親く送經をせられたもので有るかも知れない。

三　むすび

已上略して法事讃の內容組織について一言したが、要するに法事讃はその形式上からいへば、全く天台の法華三昧の行法から來てゐることは明らかで、更にその法華三昧は溯つていへば普賢觀經等の五悔の法から來てゐることは言ふ迄もない。兎に角淨土門に於ては、この法事讃ぐらひ整足した行法は無い譯で、後世起つた淨土門の法式は我々の日常の勤行式を始め大底みなこの法事讃がその本に成つてゐる。それからその內容であるが、是は前述の如く可なり復雜な組織になつてゐる。けれども大體からいへば次の如く五悔の法になる。

法事讃
- (一) 前行分
  - (一) 敬禮
  - (二) 懺悔
- (二) 轉經分
- (三) 轉經
- (三) 後行分
  - (四) 發願
  - (五) 回向

中に於て前行分の所詮は決局厭離穢土であり後行分の所詮は欣求淨土であり。その厭離の心を欣求のそれに轉ぜしむるものは中間の轉經に在るので、約言すれば法事讃一部の精神は全く厭欣の心を勸むる事に在つたと云へる。